

書評

ロルフ・シュトロートマン (2014) 『ヘレニズム帝国における宮廷とエリート：
アカイメネス朝以後（前 330-30 年）の近東』 エディンバラ*

STROOTMAN, Rolf (2014) *Courts and Elites in the Hellenistic Empires: The Near East after the
Achaemenids, c. 330 to 30 BCE, Edinburgh*

酒嶋 恭平 SAKESHIMA, Kyohei

京都大学大学院文学研究科博士後期課程

ヘレニズム時代（紀元前 330-30 年）に勃興した諸王朝の宮廷といえ、何よりもまず学問の発展の場というイメージが想起されよう。とりわけ、プトレマイオス朝の中心地であったアレクサンドリアでは、アルキメデスら名立たる学者が輩出し、文献学や数学などの様々な学問が著しい進歩を遂げた。

だが、こうした宮廷、およびそれぞれの宮廷と結びつく政治的社会的組織である宮廷社会は、第一にヘレニズム世界の政治・外交の中心地であった。宮廷を運営する王たちは莫大な富と権力によって広大な領域を支配し、ギリシア人やイラン人など多民族で構成される臣下を用いて、ヘレニズム世界を牛耳ったのである。また、こうしたヘレニズム時代の宮廷で注目すべきは、近東などの「東方」と、ギリシア世界などの「西方」の文化を融合させたことによって、新しい宮廷文化を形成したことである。これは、ヘレニズム世界を征服して東地中海世界を制覇したローマのみならず、パルティアやビザンツ帝国、オスマン帝国などにも影響を与えたという。

それでは、ヘレニズム諸王朝の宮廷の特質を挙げるとすれば何だろうか。この問いは、ヘレニズムという時代の特徴のみならず、後の時代に栄えた宮廷の社会や文化を理解する上で重要な意義を持つ。そしてこの課題に取り組んだのが本書『ヘレニズム帝国における宮廷とエリート：アカイメネス朝以後（前 330-30 年）の近東』である。

宮廷の政治的社会的機能に注目し、ヘレニズム王たちが宮廷を通して権力や富をどのように（再）分配したのか、臣下をどのように統合したのかを問う本書は、現在オランダはユトレヒト大学に所属する歴史家ロルフ・シュトロートマンが 2007 年にユトレヒト大学に提出した博士学位請求論文に加筆・修正を加えたもので、ペルシア（イスラム以前のイラン）とその受容に焦点を当てた *Edinburgh Studies in Ancient Persia* シリーズに収められている。本書は、かつてのアカイメネス朝の領域を支配したセレウコス朝に比重を置きつつも、ヘレニズム期東地中海世界に勃興した諸王国にまで考察範囲を拡大している。以下では、本書の内容を紹介した後、本書全体に関してコメ

* STROOTMAN, Rolf, (2014) *Courts and Elites in the Hellenistic Empires: The Near East after the Achaemenids, c. 330 to 30 BCE, Edinburgh*: Edinburgh University Press.

ントする。章毎の批判については各章の紹介の際に適宜述べる。

序章ではまず、本書の目標を、宮廷の側面からヘレニズム王権という現象に新たな光を投射することと設定する。そのため本書では宮廷の政治的社会的機能に注目し、アンティゴノス朝、セレウコス朝、プトレマイオス朝、アッタロス朝を、他民族を含みこむヘレニズム帝国として主たる考察対象とする。こうしたヘレニズム王朝は、自身の軍事力のみで領域支配を達成できず、配下の都市、とりわけ都市内のエリート層の協力を必要としたという。また、ここでは各王朝とその宮廷の歴史的特質も簡潔に示される。次いで、先行研究が概観される。最初にヘレニズム王朝と東方の関係に関する研究史への反省が述べられているが、ここで著者は、アカイメネス朝と古代エジプトの継続性を強調する 1970 年代以降の潮流の行き過ぎを指摘し、共時的な帝国同士の関係に注目すべきとする。また、ここでは、ヘレニズムの宮廷が従来包括的に研究されてこなかったという、研究史上の問題点も指摘される。

さて、第 1 部では、本章を貫徹する理論的前提や、ヘレニズム期宮廷の歴史的発展や関連する建築物、施設を整理・紹介する。第 1 章では、まず幾つかの先行研究を援用しつつ、本書で扱う宮廷が定義される。また、宮廷の機能についてはエリアスとクリューデナーによる宮廷のモデルを採用しつつ、宮廷を以下のような場として捉える。すなわち、①政治的アリーナ②行政的中心③象徴的中心④王の表象のためのステージ⑤（再）分配の場所。これらの側面は第 2 部以降で具体的に分析される。

第 2 章では王権と表象との関係を問う。この問いに対して、著者は政治学者ティリーの政治権力に関するモデルを援用する。ヘレニズム王は暴力による支配を貫徹できず、ポリスと対峙する際にはポリスの救済者として振舞う必要があった。一方、王たちは王位の正当性を軍事的成功に求める必要もあった。王たちはしばしば勝利者と救済者という表象を用いるが、これは現実の王の振舞いと一致するのだと著者はいう。

第 3 章では、各王朝の宮殿が検討される。ヘレニズム諸王朝の宮殿は概ね市民が自治運営する都市に隣接している。では、都市と宮殿とは現実的、観念的にどのように繋がり、どう分離するのか。著者は上で述べた 4 王朝の宮殿を概観した後、その特徴を指摘する。それによれば、宮殿は自治都市の核でありながら、物理的には都市と隔絶されていた。しかし両者の隔たりは厳密ではなく、ほとんどの宮殿において移行的（transitional）なエリアが存在し、ここで市民と王とが相互交渉を行うのだという。本章では各王朝の建築物が紹介され、後の議論における前提を提示する箇所であったが、各建築物の空間構造や、そこに表れる権力関係などについて議論を深める余地があっただろう。また、王宮や本章で論じられた建築物について、図版を用いて十分に紹介すべきだったと思われる。

第 2 部では、宮廷において活動した人々、すなわち、王、王妃、王子、廷臣らの関係に焦点が当てられる。第 4 章では王位継承が論じられる。ヘレニズム王の多くは一夫多妻制を採用し、そのために王位継承候補者も複数存在する状況になり易い。複数の権力者の存在は王朝の運営に混乱をもたらす可能性を持つ。こうした状況から、従来の議論においては、ヘレニズム諸王朝は王

位継承に関する明確な規則の形成に失敗した、と考えられてきた。しかし、著者によれば、ヘレニズム諸王は、王位継承者の指名や王妃の政治・外交分担により、王族を階層化し、自身の利益を保持することができたという。著者の議論は魅力的だが、王の裁量によって彼が利益を得るか否かが決まる、とする著者の主張は、先行研究のいう「規則」の不在を否定するものではなく、従来の議論を刷新するほどの強い主張に至っていない。

第5章では、宮廷の生成と、「フィロイ」と呼ばれる人々に焦点を当てる。フィロイとは、「友愛（フィリア）」に基づく私的紐帯によって王と繋がりを持つ人々を指す。彼らはマケドニア人を中心とするものの、大部分はギリシア人によって構成される。彼らは時に王国運営の中核を担うと同時に、故郷との繋がりも維持し、王と故郷両方の利益を代表する中間者になりえたという。また、アナトリア以東を版図に加えたアンティゴノス1世モノフタルモスやセレウコス朝は、アレクサンドロス大王の死の直後と前2世紀頃から、イラン人の貴族の登用を増加させる。こうしたイラン人貴族は、「フィリア」とは異なる方法で王と結びついていたという。また本章では、セレウコス朝研究において、イラン人の位置を軍事的組織から見直す必要があることが指摘される。セレウコス朝におけるイラン人の位置を再検討すべき、との著者の指摘は是認できる。しかし、イラン人が軍事的な職務に就く傾向にあったということは、王と彼らとの間にフィリアが無かったということの証明にはならず、イラン人がどのような手段で王と繋がるのか、著者の説明ではその点が曖昧であった。

第6章では、王の小姓に焦点を当てる。彼らは将来王位を得る王子と共に養育された人々で、ギリシア語では *basilikoi paides*、ラテン語では *regii pueri* と表現される。残念ながら王の小姓については史料が乏しく不明なことが多いが、一般には古来の慣習が制度化したものと考えられている。著者によれば、小姓は、王子と共に養育されることで、王に対する忠誠心を得ると同時に新たな支配階級を生成し、王権を制限する危険もあったという。

王権に対する制限については第7章で深く議論される。ここでは、①王は決して宮廷を支配したわけではない②フィロイに対して付与される宮廷の称号は、「贈与＝交換」の一部である③「贈与＝交換」は宮廷社会の主たるメカニズムである、という3つの主張が展開される。著者によると、ヘレニズム諸王は、観念上、フィロイたちとは平等な関係を築いていたという。しかし、王は贈与と階層分化によって、彼らを支配しようとした。ところが贈与には多額の出費が伴い、王は富裕なフィロイに依存する可能性もあった。このように王もまた宮廷の中で形成される「贈与＝交換」関係の虜なのだという。本章では、芸術や科学の中心地としての宮廷の考察もなされる。王がギリシア文化の保護者となったため、宮廷はヘレニズム文化促進の中心地であったが、そこには王からの愛顧を巡る宮廷内の競争が関わっていたという。本章の議論ではフィロイの多様性がやや恣意的に取捨されているように感じられた。例えば、宮廷に出入りしながら王と距離を保ったフィロイに関して——例としてリュシマコスの宮廷に出入りしつつ王国に関与しなかったアテナイ人フィリッピデス（プルタルコス「デメトリオス伝」『英雄伝』12章5節）が挙げられる——、本章では扱われていない。また、史料からはフィロイが王を裏切る事例も確認可能である

(e.g. ディオドロス・シクロス『歴史叢書』18巻19-20章1節)。このようなフィロイの存在が、王が彼らを扱う際に留保をもたらしたはずである。

第8章では、セレウコス朝とプトレマイオス朝で特に顕著にみられる宮廷位階システムを問う。各王朝の宮廷位階システムにおいては、単なる名誉として与えられる称号と、実際の職務を指示する称号とが存在する。本章では、こうした称号の付与は「贈与＝交換」の一つであるということ、また、形成され始めた貴族階級に対抗し、前3世紀より、王朝の主導権を再び獲得しようとした各王によって、称号の付与が行われたことが主張される。著者によると、宮廷位階システムはある程度セレウコス朝、プトレマイオス朝、アンティゴノス朝で共有された文化であったという。また、宮廷に来る人々は自身や自身の故郷の利害を持ち込むために、宮廷には様々な利害が渦巻くこととなる。そこで王は宮廷人の自由を抑え込むために、「最良 (favourites)」とする者を選び、王と宮廷人との間を遮断させる役割を担わせたという。

続いて第3部では、王朝の儀礼や儀式について論じられる。第9章では饗宴や結婚式など宮廷内外の人々を宮廷へと招き入れる儀礼について考察される。一般に饗宴や宴会の場は、ヘレニズム宮廷の中でコミュニケーションの場として機能した。ここで王は、自らの富と気前の良さによって王としての威厳を提示し、客人を歓待する。こうした儀礼は参加者・観衆の構成に応じて変化する。また本章では、狩猟や宮廷の衣服に関しても議論される。著者は両方の慣習を東方起源と結論しようとする研究動向に異を唱え、とりわけ後者に関しては考古学の成果を援用することで、ギリシアやマケドニアに起源を求める可能性を指摘する。饗宴に関連して跪拝礼にも議論が及び、王は場面毎、相手毎、儀礼毎に振舞いを使いわけることが示される。なお、著者はここで衣服の機能——著者によると衣服を通してフィロイ間に団結をもたらす一方で、王から下賜される衣服がフィロイ間の階層化をもたらす、という——について論じるが、ここでの議論はフィロイ間の階層化を論じた第8章で論じるのが相応しかったように思われる。

第10章では王位継承の儀礼について議論される。ヘレニズム期の王朝においては一般に王位は先代が没してから継承されるため、先代の葬送儀礼と新王即位の儀礼は同時に行われる。著者は儀礼の手順を分析し、そこには王朝の継続性を広告する機能があったと指摘する。また本章では、即位に関連してディアデマ（冠帯）の意義も考察される。ディアデマは王の地位を示すが、戴冠の儀礼は史料中に見られないために、即位する王が公の場に姿を現す際には、既にディアデマを着用していると考えられる。著者はここから、戴冠という行為自体は即位の儀礼においてさして重要ではなかったと考える。

第11章と第12章とはセットとなっており、ここでは王のページェントが考察の対象となる。まず第11章では、王が臣下となった都市に入城する際の儀礼が考察される。入城の際の儀礼は、土地毎のコンテクストによって異なるが、著者によれば概ね以下の手順を取る。すなわち、①主門の外での受け入れの儀式②都市内への受け入れ③都市の最も重要な聖域での犠牲式。都市によって「招かれる」という体裁をとることで、王は都市の自治を尊重する姿勢を示すという。また、都市の神々を崇敬することで、王は都市市民の一人として自らを位置づける。しかしその一方で、

豪勢な犠牲を奉納することで、王は都市で最も高い名誉を授けられた「市民」ともなるという。王は入城を通して、都市内部のヒエラルヒーの頂点に立つのである。

第12章では、王による祭典行列を考察する。ここでは、プトレマイオス2世フィラデルフォスが前3世紀初頭にプトレマイエイア祭で行った祭典行列と、アンティオコス4世エピファネスが前166年にダフネで行った祭典行列が分析される。著者によると、彼らは行列の実施を通して王朝の権力を表示すると同時に、彼らの権力の在り方を創造したという。ここで王は自身の富と権力を臣下に示すだけでなく、自らの軍事的性質を明らかにする。こうした性質は、主としてギリシアとマケドニアにルーツを持つシンボルを通して明らかにされるという。例えばプトレマイオス朝においては、ディオニュソスが最も重要なシンボルとして扱われる。というのも、この神はインドの征服者という、アレクサンドロスを彷彿させる軍事的な神話を有するからである。プトレマイオス2世の祭典行列については波部氏がより詳細に議論しているが、氏によれば、プトレマイオス2世がディオニュソス崇拝を進め、祭典行列の主題として取り上げたのは、彼が演劇や音楽を振興したこと、さらにディオニュソス崇拝自体の流行が東地中海世界で見られたことが理由として挙げられるという¹。これに照らせば、祭典行列を通して、著者が想定するよりも多彩な王権の発露があったように感じられる。

結論では、各章の議論がまとめられ、その後今後の研究の展望が述べられる。

本書は、ヘレニズム時代の宮廷を多様な側面から考察した初めての研究成果であり、ヘレニズム宮廷の包括的な社会的・政治的・文化的モデルを描いた本書の価値は高い。また、宮廷（社会）の観点からヘレニズム王権のイデオロギーやメカニズムを解明した点も評価すべきである。

考察における枠組みの観点から見ると、通常は別個に扱われるヘレニズムの諸王朝を包括的に扱った筆者の試みは意義深い。一般にヘレニズム諸王国は、**national monarchy** と呼ばれるアンティゴノス朝と、絶対君主制として見做されるセレウコス朝、プトレマイオス朝とが異なる性質を持つ王朝として区別された上で、更にエジプトの伝統を継ぐプトレマイオス朝とアカイメネス朝の後継王朝となったセレウコス朝とが切り離され、個々の相違点が注目される傾向にある。当然別個に研究蓄積が生み出される結果となるが、本書はこうした先行研究を幅広く蒐集し、独自の議論構築に成功している。この議論を補強すべく著者はヘレニズム以前のマケドニア王朝（アルゲアス朝）の影響を強調しているが、これに関しても近年の考古学的成果を摂取した上で慎重な議論を心掛けている。

同様に史料分析における方法論の観点から本書で特徴的なのが、文化を柔軟で可変性のあるものと捉えた点にある。とりわけ宮廷での儀礼を論じた第3部では、この手法がよく活かされている。著者によれば、ヘレニズム王はその時々に従うべき慣習に応じて振舞ったという。例えば、イラン人臣下を前にする際にはイランの慣習に即して、エジプト人にはエジプトの慣習に即して

¹ 波部雄一郎 (2014)『プトレマイオス王国と東地中海世界——ヘレニズム王権とディオニュシズム——』: 123-151, 西宮: 関西学院大学出版会. 特に 145 頁を参照のこと。

振舞ったという。方法論自体に新奇性はないが、ギリシア文化を中核としながら、臣下に合わせて表象を使い分ける王と王権の有り様について、著者なりの図式を提供している。

他方で、本書には今後課題となるべき論点が幾つか残されているように思われた。

まず、理論が先行した結果、史料の根拠の提示や詳細な議論が望まれた箇所が散見された点。それは、分析枠組みが先行する箇所（第5章）で顕著であった。これによって議論がやや一般論的な性質を帯び、ヘレニズム宮廷独自の特性が見えにくくなっているように感じられた。関連して、本書には比較史の視点が皆無であるために、ヘレニズム王朝の宮廷社会が、他の時代、地域で展開された宮廷社会との差異や特徴を持っていたのか見えづらかった。ヘレニズム王朝の後を継いだローマやパルティアとはどのような差異があるのか、またギリシア正教を信仰するビザンツ帝国とは、王権の自己表象はどう異なるのか。多民族・多宗教を臣下に抱え込んだオスマン帝国とはどのような相違点が見いだせるか。前後の時代に勃興した諸王朝・諸帝国との比較を通して、ヘレニズム期の宮廷社会の史的特質が明白になり、本書の意義もより深いものになったであろう。

また、ヘレニズム王朝に対するアカイメネス朝の影響をどのように捉えるべきか、宮廷に対してどのように東方の影響が浸透したか、あるいは東方と西方の文化や制度の交わりをどのように捉えるべきか、著者は明確な回答を示していない。それは上で示した著者が採用した方法論の弊害でもある。例えば、アルゲアス朝の影響力の強さを指摘する箇所では、アルゲアス朝に対する東方の影響が十分に考慮されていない。本書の射程からやや外れるとはいえ、こうした問題にはより紙幅を割いてよかったのではないだろうか。

こうした課題点はあるが、本書の学問的価値は高い。近年、宮廷を軸としてヘレニズム王権を捉えなおす試みが新たに進展しているが²、本書はこうした潮流の一つに位置付けられる。本書から、ヘレニズム王権の研究に更なる成果がもたらされることが期待される³。

参考文献

ERSKINE, Andrew, LLEWELLYN-JONES, Lloyd and WALLACE, Shane (eds.) (2017) *The Hellenistic Court: Monarchic Power and Elite Society from Alexander to Cleopatra*, London.

MÜLLER, S., (2015) 'Rezension von: Strootman 2014' *Historische Zeitschrift*, 301: 751-752.

柴田広志 (2014) 「小アカイオスの反乱——セレウコス朝の統治構造と王権確立の課題——」『社会科学』104: 93-114.

² 最新のものでは ERSKINE, Andrew, LLEWELLYN-JONES, Lloyd and WALLACE, Shane (eds.) (2017) *The Hellenistic Court: Monarchic Power and Elite Society from Alexander to Cleopatra*, London. がある。関連した研究として、我が国でも波部氏による前掲書の他に、柴田広志 (2014) 「小アカイオスの反乱——セレウコス朝の統治構造と王権確立の課題——」『社会科学』104: 93-114. を挙げることができよう。

³ なお本書に関しては既に他の評者による書評があり、そちらも参考されたい。MÜLLER, S. (2015) *Historische Zeitschrift* 301: 751-752.

波部雄一郎 (2014) 『プトレマイオス王国と東地中海世界——ヘレニズム王権とディオニシズム——』: 123-151, 西宮: 関西学院大学出版会.

(さけしま きょうへい 京都大学大学院文学研究科)